

カトリック麴町教会「ミサがわかるセミナー」2021-22 シーズン
総合テーマ：共にささげる感謝の祭儀

第1回 ともにささげるとは？ ～福音を分かち合う喜び～

2021年7月配信

担当：石井祥裕

はじめに 今、ミサ（感謝の祭儀）について学ぶ意味

2021年6月13日付 『カトリック新聞』
見出し:日本の『ミサ典礼書』 改訂に向け前進
「ミサの式次第」など、典礼秘跡省が認証
これから、慣れ親しんでいた、式文が少し変わっていく
あらためてミサの意味を考えよう → 学ぶための大切な時期

これまで；

1962～1965 第2バチカン公会議
1963 『典礼憲章』公布
1970 『ローマ・ミサ典礼書』規範版第1版（1970） 現行ミサの始まり
1975 同第2版（1975）
1978 日本語版『ミサ典礼書』暫定版（1978）⇒現行
2002 『ローマ・ミサ典礼書』規範版第3版（公布2000）
2015.11 新総則に基づく、一部改訂 施行

今回の改訂とは

『ローマ・ミサ典礼書』第3版に基づく
完全版としての日本語版 『ミサ典礼書』を準備している最中
規範版（ラテン語版）の意味をより深く学び、式文を新たにする
文語体の部分（ミサの賛歌）を現代語的にする
これまでの不備・不十分点を見直し、解決する

⇒ 式次第と奉献文について 2021年5月23日 典礼秘跡省からの認証
⇒ 実施に向けての詳細決定 2021年7月12日からの司教総会

今回の課題 ともにささげるとは？ ～福音を分かち合う喜び～

「開祭」と「ことばの典礼」に沿って

前提：わたしたちが主日に参加し、ともにささげるミサの種類

「会衆とともにささげるミサ」

今のミサ典礼書の基本型

式文は、司式司祭と会衆との対話（ことばのやりとり）で進行する

司式者と会衆とのやりとりの中で展開される

さまざまな「ともに」の関係……

【開祭】

(注記) 会衆が集まると入祭の歌を歌う。
その間に司祭は奉仕者とともに祭壇へ行く。

会衆の集まりが基本

入祭の歌

(総則: 会衆の一致を促し、会衆の思いを典礼季節と祝祭の神秘に導入する)
司祭と奉仕者がともに祭壇へ行く → 祭壇への表敬
(祭壇が象徴するキリストの現存)

あいさつ 1

司祭: 父と子と聖霊のみ名によって。
会衆: アーメン。

祈りの初めと結びの慣用句 →

父と子と聖霊のみ名による洗礼を受けたキリスト者のあり方そのもの
神ご自身 父と子と聖霊の交わり、その神との交わりのうちにあること
「み名によって」(み名のうちに、み名と結ばれて)
父と子と聖霊である神と結ばれている、「わたしたち」=神の民

◎アーメンの重要性

ヘブライ語の音 アアメーン

元にあるもの エメト (真理・真実・誠) ⇒エムナー (確信・信頼)

⇒アアマン (頼りになる)

⇒アアメーン (たしかに、まことに、ほんとうに)

イエスの教えの冒頭で告げる「はっきり言うておく」(新共同訳)

ほんとうに言うておく、「まことに、まことに 汝らに告ぐ」

⇒アアメーンの言葉の響きを通して、イエスの心とも重なりあう

典礼での「アーメン」の役割 = 宣言・賛美・願いへの同意

「ほんとうに」そう信じます/そう賛美します/そうなりますように。

⇒共同体としての公の祈りを完成させ、神にささげられ、人々に示されるものとなる。
神の民としての連帯性のしるしでもある。

あいさつ2

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが
皆さんとともに」「また、司祭とともに」
「主イエス・キリストによって、神である父からの恵みと平和が
皆さんとともに」「また、司祭とともに」
「主は皆さんとともに」「また、司祭とともに」

使徒的あいさつ（新約聖書の「手紙」のあいさつ文）

端的に神がともにいること、キリストがともにいることを示す

基本型 「主は皆さんとともに」

「また司祭とともに」 原文直訳「またあなたの霊とともに」

《聖書が示すあいさつの姿》

旧約：神の民の間でのあいさつ句：ルツ 2・4

「主があなたたちと共におられますように。」「主があなたを祝福してくださいますように。」

神がともにおられることを、ともに確認し合う対話句

パウロの手紙に初め、終わりのあいさつ

「わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、

あなたがたにあるように。」（ローマ 1・7 等）

→ 式文「主イエス・キリストによって、神である父からの恵みと平和が皆さんとともに」

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。」（二コリント 13・13）

→ 式文「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが皆さんとともに」

ある形式では、

「わたしたち主イエス・キリストの恵みがあなたがたの霊と共にあるように」（ガラテヤ 6・18）

→ ミサ式文の会衆の応唱句

直訳 「また あなたの霊とともに（ありますように）」

→ 「また あなたとともに（ありますように）」 同義と考えてよい

回心

司祭による招き)

一同) 全能の神と、兄弟の皆さんに告白します。

わたしは、思い、ことば、行い、怠りによってたびたび罪を犯しました。

聖母マリア、すべての天使と聖人、そして、兄弟の皆さん、

罪深いわたしのために神に祈ってください。

司祭) 全能の神がわたしたちをあわれみ、罪をゆるし、

永遠のいのちに導いてくださいますように。

会衆) アーメン。

→ どのような「ともに」（共同性）が意識されているでしょうか？

あわれみの賛歌

主よ、あわれみたまえ。

主よ、あわれみたまえ。

キリスト、あわれみたまえ。

キリスト、あわれみたまえ。

主よ、あわれみたまえ。

主よ、あわれみたまえ。

主キリストが来られている、ともにおられることに対する 主への賛美
(願いと賛美が一体となっている) ⇒ 他の賛歌にもみられる
主を前にして向かい合ってささげる賛美 ⇒ ミサの賛歌の基本型

参考「ホザンナ」詩編 118：25「どうか主よ、わたしたちに救いを」(下線部 ホシアー ナー)
ホシアー ナー → ホサナ (ホザンナ)
救いへの願いの句が 救い主を賛美する定型句に (感謝の賛歌に)

栄光の賛歌

天のいと高きところには神に栄光、
地には善意の人に平和あれ。
われら主をほめ、主をたたえ、 主=あなた
主を拝み、主をあがめ、
主の大いなる栄光のゆえに感謝し奉る。
神なる主、天の王、全能の父なる神よ。
主なる御ひとり子、イエス・キリストよ。
神なる主、神の小羊、父のみ子よ。
世の罪を除きたもう主よ、
われらをあわれみたまえ。
世の罪を除きたもう主よ、
われらの願いを聞き入れたまえ。
父の右に座したもう主よ、
われらをあわれみたまえ。
主のみ聖なり、主のみ王なり、 主=あなた 王=主
主のみいと高し、イエス・キリストよ。
聖霊とともに、父なる神の栄光のうちに。
アーメン。

集会祈願 開祭を締めくくり、その心を告げる、全体が広義の祈願

司式者) 招き 「○○○○祈りましょう。」
一同) (沈黙のうちに祈る)
司式者) 祈願 (本来は結びの祈り)
「・・・わたしたちの主イエス・キリストによって。」
一同) 「アーメン。」

司祭が共同体を代表し、会衆は、沈黙と同意の句をもってともにささげる

例) 復活の主日 (日中のミサ) の集会祈願

全能の神よ、 (神への呼びかけ)
あなたは、きょう御ひとり子によって死を打ち砕き
永遠のいのちの門を開いてくださいました。 (神のみわざ、恵みの想起・確認)
主イエスの復活を記念し、この神秘にあずかるわたしたちを、あなたの霊によって新たにし、
永遠のいのちに復活させてください。 (神の意志に添う願い)

結びの句：三位一体の神への信仰宣言が含まれる

「聖霊の交わりの中で、
あなたとともに世々に生き、支配しておられる御子、
わたしたちの主イエス・キリストによって」

【ことばの典礼】

意味：

原風景ともいえる記述

「ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、
その日に三千人ほどが仲間に加わった。
彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに
熱心であった。……」 (使徒言行録2・41-42)

使徒の教え	→	福音書、手紙、黙示録・・・新約聖書に成長
祈ること	→	感謝の祭儀の祈り全般

「神の民」として 聴き続けるべき 「神のことば」

《旧約》

「今、もしわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るならば、
あなたたちはすべての民の間であって、わたしの宝となる。
世界はすべてわたしのものである。
あなたたちは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる」(出エジプト19・5-6)

《新約》

「あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。
それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、
あなたがたが広く伝えるためだったのです」 (1ペトロ2・9)

神のことばを「聴く」奉仕と「告げ知らせる」奉仕がともにある
ことばの典礼の中での姿勢

座る：神のことばを聞く、神の民の姿

立つ：キリストの預言職・祭司職への参与、自ら告げ死せる者となる

《ことばの典礼の規範的解説書＝「朗読聖書の緒言」(1981,邦訳1994)》

- 1 神のことばの典礼祭儀についての一般原則
- 2 ミサにおけることばの典礼
- 3 ミサのことばにおける務めと役務
- 4 以下 ミサの朗読配分の構造

◎ことばの典礼の意味について

- * 「典礼祭儀は、神のことばそのものをたえず、完全に、力あるものとして示す」(緒言4項)
- * 「教会は神のことばを聞くことによってたてられ、成長していく」(同7項)
- * 「すべてのキリスト信者は、霊による洗礼と堅信によって神のことばの使者となる」(同)

◎実現のための諸原則

- A) 各国語使用
- B) 共同体での分担奉仕 信徒も朗読参加
- C) 3朗読制: 第1 (旧約, 復活節=使徒言行録)、第2 使徒書、福音朗読
「神のことばの食卓がいつそう豊かに信者に供されるために、
聖書の宝庫がより広く開かれなければならない」 (『典礼憲章』51項)
- * 「旧約の中に新約が隠れており、新約において旧約が明らかになるからである。……
キリストはやはり聖書全体の中心であり充満である」 (緒言5項)

◎朗読配分 主日の三年周期制

A年、B年、C年の配分導入 (紀元1年をA年と想定)

A年 = マタイ中心

B年 = マルコ中心

C年 = ルカ中心

ヨハネは、待降節・降誕節、四旬節・復活節/B年の補充

◎典礼暦年を通しての朗読展開によって キリストの神秘に参加

- * 福音朗読の配分: A年 (マタイ中心) B年 (マルコ中心) C年 (ルカ中心)
ヨハネは待降節・降誕節・四旬節・復活節の要所、B年補充に
- * 第1朗読の配分: 年間と待降節・降誕節=福音との対応関係で配分
四旬節は旧約の歴史、復活節は使徒言行録から教会の始まりを想起
- * 第2朗読の配分: 年間は一定の使徒書を数週間ずつ配分
待降節・降誕節・四旬節・復活節は、主題選択的に配分
- * 答唱詩編: 詩編は神への答えでありつつ、聖書朗読に準じる神のことばのあかし
旧約と新約の架け橋であり、神の民の祈り・黙想を導く
- * 答唱句: 詩編の一句からとられ、信者の信仰の糧として覚えられていく伝統がある
- * アレルヤ唱/詠唱 福音のうちにおられるキリストを迎える賛美。導入の意味もある

◎「キリストの神秘を一年の周期で展開する」典礼暦年との関係 (緒言3項)

◇四旬節と復活節: 主日がいづもキリストの死と復活の祝日であることを前提として

1年の中でこの神秘に特に専心し回心と入信準備に励む期間

◇待降節と降誕節: 終末の主の来臨に心向けつつ第一の来臨 (降誕の秘義) を想起する

◇年間 [=年間節]: イエスの宣教の生涯を、救いの歴史全体の中で想起し、ともに歩む

※主題的に、年間の終わりは待降節に、降誕節は年間のはじめにつながる。

◎「ことばの典礼」から信仰生活へ

* 説教: 朗読とともにキリストの過越秘義を告げ知らせるもの

* 信仰宣言: 「朗読と説教において聞いた神のことばに共鳴して答えるもの」 (同29項)

「感謝の典礼において信仰の神秘を祝う前に、信仰の基準を心に思い起こすため」

* 共同祈願: Oratio universalis (すべての人のための祈り) 信者の祈り Oratio fidelium

意向の類別 (順序)

- a) 教会の必要のため
- b) 国政に携わる人々と全世界の救いのため
- c) 困難に悩む人のため
- d) 現地の共同体のため

◎感謝の典礼・派遣への方向づけ

「(ことばの典礼と感謝の典礼の) 二つの食卓によって教会は霊的に養われ、
さらに教え導かれるとともに、ますます聖なるものとなっていく」(緒言 10 項)

- a) 叙唱・奉献文 [主の過越の神秘・キリストの奉献に結ばれる教会の奉献] への集約
聖書朗読の内容はキリストの十字架と復活の神秘(過越の神秘)に向かう
- b) 交わりの儀：復活をとおして新しいいのちの与え主となったキリストのからだにあずかる
平和への祈りと挨拶：キリストから受けた平和を分かち合う
拝領：キリストのからだをその日の福音の響きと味わいの中で受け、互いに一致する
- c) 閉祭(派遣)：以上を踏まえ、生活の中でのキリストのあかし、福音宣教へと派遣される

「福音」から見る感謝の祭儀のすがた

キリストによる救いの訪れ(福音)を
神の民として、人類の一員として、ともに受け止め、
分かち合い、キリストとのつながりを新たにし、
神に感謝し、神を賛美し、すべての人、いのちの救いを願う

足を運び、体を寄せて集えないときにも「心の集い」が大切